

頁	行	誤	正
97	下1	同格連体と、および述語同格連体 が、	同格連体、(以下削除)
99 97	下の 上16	同一名詞連体と付加連体という という名称は、Kuroda (一九七六 /七七) によって与えられたもの で、	同一名詞連体と同格連体という に関しては、Kuroda (一九七六/ 七七) によって、はじめて生成文 法の枠組で日本語について論じら れたもので、
99	下2	遊離して副詞節になるという。	遊離して(S)dのように副詞節にな るといふ。
102	上17	あるというが、出来事の展開の	あるという。これは出来事の展開 の
118 115 108 105 104	上6 下2 上19 下6	ガ・ケレド・ノニのように、 さらに、テは格助詞デはあつても、 以上のように、トコロデはデが、 以下に見るように	ガ・ケレドのように、 さらに、(削除) (以下三行削除) 以上見てきたように
118	下8	というのも、節と節とが	というのも、事実を表わす節と節 とが
126 124 119	上5 下20 下7	接続助詞のトコロガ節は、トコロ デ節と同じく、必ずタを用いなけ ればならない 結びつける働きを持つが、 すあんわち、トコロ節が表わす 格助詞へも移動の方向あるいは着 点などを表わす、(場所)と密接 に関わっている。	接続助詞のトコロガ節内の述語 は、トコロデ節と同じく、必ずタ 形でなければならぬ 結びつける働きを持つ。しかし すなわち、トコロ節が表わす 格助詞へも(場所)と密接に関わ る(移動の方向)あるいは(着点) などの用法がある。